# フィールドワーク体験記執筆要領

体験記はウェブサイト（https://safefieldwork.live-on.net/）にて公開します。本ウェブサイトには体験記が 2 つすでに掲載されていますので、適宜ご参照ください。

ハラスメントが起きた時の場所（地域、国、コミュニティー名、具体的な場所等）・時間などの背景情報、ご自身の性別（身体的性別、 性自認、性的指向）、年齢、所属、職業などをどこまで明らかにするかは、お任せいたします。

ただし、筆者ご自身を含め、加害者などの登場人物や団体などの固有名詞は仮名を使うなどして、特定されないようにしてください。ご自身の名前を公開してもよい、あるいはご自分の文献を引用する必要がある（つまり執筆者が特定される）場合などはご相談ください。

執筆要領は、別途お送りするテンプレートを参考にしてください。

体験記の字数は原則 1 万字までとします。

第 1 回投稿締切は 2021 年 5 月 31 日です。執筆した体験記はワード形式で fieldworkandsafety@gmail.com にメール添付でお送りください。

投稿いただいた原稿は、こちらで確認し次第、筆者の方に個別にご連絡させていただき、体裁や記載された内容に関してご確認・ご相談させていただきます。

体験記の内容としては、下記のような話題を想定しておりますが、これらに限定するわけではありません。また、複数の話題にまたがって執筆していただいても構いません。地域や被害内容が異なり、体験記を複数に分けたい場合などは、遠慮なくご相談ください。
なお、本プロジェクトか考えるハラスメントについては末尾に記載してありますが、ハラスメントかどうか迷う事例でも、書いてくださってかまいません。むしろ，そのようなはっきりしない事例からも、ハラスメントについて考えたいと思っております。

・フィールドワーク中に遭遇した（あるいは遭遇し得た）具体的な危険・ハラスメントとそれらに対する対処
・体験から学んだこと（あるいは失ったこと）
・フィールドワーク実施にあたり事前にした（すべきだった）安全・ハラスメント対策
・事前準備や対策に役立つ資料・文献、ウェブサイト、相談先
・指導学生や同僚がフィールドワーク中に遭遇した危険・ハラスメントとそれへの対処（必ず指導学生や同僚本人の了承を得てください）
・指導学生などのフィールドワークに同伴する際に気を付けていること
・自身が加害者になっていた可能性についての内省や振り返り（内容によっては、掲載内容・方法についてご相談させていただくことがあります）
・加害者になってしまう怯え・恐れ
・他のフィールドワーカーまたは教員に投げかけたい疑問・メッセージ

・現地で危ない目に遭いそうな・遭った状況や場所に関する情報
・危険やハラスメント行為に遭った・遭いそうになった時、機転をきかせてくれた人がいて助かった等のエピソード

私たちが考えるハラスメント(暫定版)

フィールドワーク体験記の収集にあたり、私たちは暫定的に「ハラスメント」を以下のようなものだと考えています。

“相手の意に反する嫌がらせ行為、身体的・精神的苦痛や傷害、物質的な不利益を与えるすべての行為”
“本人のセクシュアリティに対する、強制や威嚇によるあらゆる性的行為や、性的行為の試み、性的行動への衝動、望まない性的発話や接近であり、被害者とどのような関係であっても、自宅や職場に限らずどのような場所であっても起こるもの（WHO 2002: 149）”

（具体的には、人格否定などの不当な言動、暴力行為、噂の流布などの嫌がらせ行為、人間関係の悪化・崩壊、生活・研究環境の悪化・崩壊などの身体的・精神的傷害を与えるすべての行為、レイプなどの性暴力・犯罪行為、身体的な接近・接触、性的ジョークなどの性的な言動、などを含む。）

このようなハラスメントのとらえ方が、非常に大雑把なものであることは承知しております。これは、「セクシュアル・ハラスメント」「アカデミック・ハラスメント」「パワー・ハラスメント」などの名前のついたハラスメントに分類することが難しい事案（年齢、セクシュアリティ、人種、民族、国籍等に関わる差別など）が容易に考えられることや、1 つ以上のハラスメント行為が重層的に、同時多発的に起きうることからです。

体験記のタグづけのために、テンプレートでは便宜的に上記の 3 つのハラスメントを挙げていますが、フィールドワークを切り口としている本共同研究では、これら 3 つのハラスメントの弁別性について議論することが生産的であるとは考えておりません。むしろ、ハラスメントにあたる言動や行為を具体化・カテゴリ化し、事前に定められた定義に依拠しすぎることは、フィールドで関わる人たちとの相互行為を通じて「何がハラスメント行為にあたるのか」を考え、理解し、行動にうつしていく双方向性や内省性を無視することに繋がるという懸念があります。

フィールドワークにおけるハラスメントを考える上で、ハラスメントの区分よりも我々が重視しているのは、既存の関係がフィールドにおいて暴力化する可能性、そしてフィールドで出会う人たちとのあいだで生まれる捻じれた社会関係です。

権力関係、社会的・職務上の立場の違い、継続的な関係は、ハラスメントの温床になりやすいと言われます。特に、フィールドワークの初期において、右も左も分からない若手研究者にとって、先輩や指導教員の存在は非常に大きいものとなりがちです。逃げ場のないフィールドでの濃密な人間関係のなか、既存の上下関係が固定化・肥大化・暴力化してしまう可能性。これが、フィールドワークにおけるハラスメントのひとつの構造ではないかと考えています。

同時に、フィールドワーカーがフィールドで様々な人物と構築する関係性は、多様かつ流動的であり、そこで新たな権力関係が立ち現れる場合もあります。フィールドワーカーは、高等教育を受け、しばしば（調査される側の地域よりも）先進国の出身であり、裕福である、といった属性を帯びており、それらの帰属が前景化するなかで、調査対象者とのあいだに非対称な関係・格差を生み出すと指摘されてきました。ところが、フィールドワークにおいては、調査者は対象者に対して教えを乞う立場でもあり、調査の初めの頃は若造・半人前と見られたり、年齢や性別による帰属が立ち現れたりする場面もあります。同様にフィールドの人びとの帰属も多層的であり、先にあげた大前提としての非対称な関係とは捩れた形の関係が前景化することもあるでしょう。

私たちは、この捻じれた関係とアカデミズムの構造とは深く結びついていると考えます。これまで、フィールドワーカーが調査対象者との関係のなかで劣位に置かれうる事実や可能性については、多くの場合、不問にされたり、もしくは、フィールドワークに否応なしについてまわる洗礼・通過儀礼としてのみ認識されたりしてきました。つまり、この捻じれた関係を前提に起こるハラスメント行為について声をあげることは、軟弱で未熟な初心者の泣き言として捉えられ、フィールドワーカー自身の我慢と忍耐でもって乗り越えなくてはいけない壁として当然視されてきたのではないでしょうか。

もちろんこれらだけに限らず、両者の重なり合う領域、あるいはまた別のハラスメントが立ち現れることもあり得るでしょう。例えば、フィールドで出会う人たちは、必ずしも調査対象者だけに限られません。自分とは別の高等教育機関に所属するフィールドワーカーや、現地の研究者、大使館職員、NGO/NPO 職員など、フィールドを通じて様々な人と知り合い、関係性を築いていく中で、フィールドワーカーは新たな社会関係・権力関係に身を置くことになります。慣れないフィールドでの孤独や、限られた時間のなかで学位論文を書かなくてはいけない、研究論文の種をつかまなくてはいけない、といった焦りが、ハラスメントの起こりやすい環境、または起こったとしてもそれを声に出すことを選択できない環境を醸成・助長してしまう可能性もあります。

多くのフィールドワーカーは、このような複雑な関係性、社会的立場、心理的状況のなかで悩み、揺れ動きながらフィールドワークを行ってきました。先輩や指導教員などとの人間関係は、フィールドから帰ったあとの研究人生を大きく左右するため、ハラスメントに声をあげることが困難なことが多いでしょう。また、フィールドで調査対象者から受けた嫌な思いを、ハラスメントと主張していいのかどうか、もやもやすることも多いと思います。

フィールドワークを巡るハラスメントについての実態把握の試みがされていない現状では、このハラスメントの特質や要因の多くは想像に留まってしまいます。ですが、私たちは、複雑に捻じれた権力構造の中で板挟みになっているフィールドワーカーの「もやもや」とした感情のゆれに耳を澄ませることが、学問構造の変革につながり、ひいては、現在そして未来のフィールドワーカーを守り、育てることにつながると信じています。この体験記の収集や別途行うアンケート調査を通して、私たちだけではなく、皆さんの感じている「もやもや」の内実を少しずつ明らかにしていきたいと思っています。

お問い合わせ: fieldworkandsafety@gmail.com

主催: 三大学共同研究「女性・若手研究者とフィールドにおけるハラスメントに関する共同研究」
共催: NPO 法人 FENICS